

# 草庵仏教

第147号  
(発行日)  
2002年9月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
mail:kimyoun3@zeus.eonet.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 開法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 葬儀前後の迷信

H「人が亡くなって、枕辺の香炉で線香を一本立てて焚きますが、どうしてですか」

D「真宗ではいつでも線香は横にねかせて焚きます」

H「線香を一本にしないと亡くなった人が死後、道を迷うとかいいますが」

D「生きてる人間の側の想像に過ぎません」

H「それと、一膳メシを供えて、それに箸をさしたりしますが、あれはどうなんですか」

D「あれも生きている者の想いから出てきた話でしょう。亡くなった人が死出の旅路へ出かける時の最後のメシで、またこの世に帰って来てももうメシはないから帰って来ないようにとか、あるいは死出の旅の道中弁当だとか、いろんな話があります。真宗では一膳メシはしません」

G「人が亡くなると家の神棚の前に白い紙を貼るのはどういうわけですか」  
D「真宗門徒は本来神棚はいりませんが、白い紙を貼るとするのは仏教からきたものではないです」

G「なぜ白い紙を貼るのですか」  
D「日本の神様は、死者には死の穢れがあり死者に触れるのを嫌われるというので白い紙を貼

るのでそうです。これも人間の想念の産物でしょう」

G「それに関してですが、葬式の後、清め塩を体にふりかけたりしますが、なぜですか」

D「あれも仏教からみると大変おかしな話です。死者に触れると死穢れといって、穢れるから清め塩で死穢れを浄めるといいますね」

G「あれは仏教には関係ないことですか」

D「関係ありません。これは日本の神道に関係があると思います」

G「それはどうしてですか」

D「先ほど申しましたように、日本の神様は死者に触れるのは死穢れといって、穢れるので浄めなければならぬと言っています。ただこれも神社関係の方が本当にそういわれるのかどうか問題ですが、とにかく普通はそう言われていて、死者に触れると穢れるから浄めなければならぬのだというんですね。仏教から言うところでもない話ですが」

G「穢れるというのはどういうことですか」  
D「(けがれる)というのは(気が枯れる)という意味があることです。人間の生命エネルギーのことを(気)という、そういう思想が東洋にあります。その

影響から来たのだと言われていてます。気が充実しているのを元気といい、気力があるといい、病っているのを病気といいますね」

G「そうすると(気が枯れる)というのは、生命エネルギーが弱まるということですね」

D「ええその筋の考えではそう言われるようです。そうすると、病気になるったり、生きる気力が無くなったり、悪くすると死んだりするということです。死者は穢れているから、死者に触れると触れた人の気が枯れる、だから枯れないように穢れを塩で浄めるといいます」

G「死者は穢れたものなのですか」  
D「仏教ではそんなことは一切言いません。人が生まれて死ぬるのは自然の道理であって、死ぬことはこうした浄・穢に関係のないことです。ですから死者に近づいたからといって、穢れるなどは申しません」

G「今まで親として非常に親密にしていた人が亡くなったとたんに、死んだ親を穢れたものと思えるのはむごい考えだと思いませんか」  
D「その通りです。ですから塩で清めるといふナンセンスなこととは廃止しようという運動が徐々になされて来て、葬儀会社でも最近では清め塩を廃止するところはかなり出てきました」

G「お葬式を友引の日にしては

いけないと世間で言いますが本当ですか」

D「単純な迷信です」

G「友引の日にお葬式をすると、死者が友を死に引き寄せるから、葬式はしない、と聞いたことがあります」

D「大体、友引は正式には(相引)で勝負なしという日のことです。ただし、そういう日すら人間が勝手にこしらえたもので、そういう日が実際にあるわけではありません。昔、一部の人間が言い出したのが広まっただけでしょう」

G「もともと勝ち負けなしの日である(相引)が、(友引き)に転化され、葬式などで忌み嫌われるようになったのですか」

D「ええそうです。(ともびき)という発音が語呂の合う(友引き)になり、それがマイナスイメージを連想させて、私たちに心理的な恐怖感呼び起こしているのですね」

## 【 秋季彼岸会 】

9月22日(日)

午後2時始まり

\*場所 念佛寺仏間

(どなたでもご自由にお参りください)

G 「そして、世間で忌み嫌われていることは出来るだけ避けた方がいいというので、なかなか無くならないのでしょうか」

D 「そうですね。災厄をよびこむ縁にひよつとしたらなるんじやあないかと、心配になるのですね」

G 「ご遺体の上に守り刀を置く場合がありますが、なぜですか」  
D 「あれも必要なことです。死者に魔が取り付かないようにする魔除けの守り刀という意味です」

G 「魔というのは何ですか」  
D 「悪鬼とか悪霊とか怨霊などをいうのですが、これも凡夫の側の想像の産物でしょう。もし、たとえそのような魔がいても、なぜ刀で防げるのかなど、考えたらおかしな話です。そういう話を本気にしだすといたずらに惑わされるだけです」

G 「ご遺体をお棺にお入れするときに旅装束の姿にする場合がありますが、あれはどう考えたらいのですか」  
D 「死後に来世への旅をするというイメージから旅装束にしますが、これも生きてる者の側からの思いでしているだけで、旅装束などはしなくていいのです。最近はこちらではほとんどしなくなりました」

G 「その時に六文銭を入れたりしますね」  
D 「あれも滑稽なことで、必要ありません。真宗では南無阿弥

陀仏の名号をお棺の蓋の裏に張ったり、入れたりします。これは亡き人が南無阿弥陀仏に導かれて浄土に生まれていただくようにとのお印です」

G 「ではご遺体はどうしたらいいのですか」  
D 「清潔な着物を着せてあげ、念珠を持たせてあげればいいのです。着物は白色にこだわらなくてもいいです。私は洋服でもいいと思っています」

G 「火葬所へ出発する時に茶碗を割りますが、あれはどうしてですか」  
D 「故人の茶碗を割る必要はありません。あれも一膳メシと同じ考えで、もうこの世に帰って来てもご飯はありませんよ、帰らずに成佛してくださいよ、という遺族の素朴な気持ちの表れといえましょう」

G 「今までお聞きしていますとしないでいいことを随分しているのですね」  
D 「しなくていいことや清め塩などのようにしない方がいいことを結構しています。逆に、仏教で勧められていることをしないのが残念です」

G 「何が足りないのですか」  
D 「真宗門徒ならお念仏を申すことです」  
G 「なぜですか」  
D 「亡き人が一番喜ばれ安心されることは、遺族がお念仏を申すこと。このお念仏が自分も亡き人も救われる真実まことですか」

から。お念仏は仏様から願われ、勧められている行いです」  
G 「お葬式の後には四十九日ですが、その間はお内仏（仏壇）の扉はずつと閉めるものですか」  
D 「四十九日の間、扉を閉めるというのは誤りです。ふだん通りに朝開けて夕方閉めます」  
G 「四十九日の間、中陰壇（亡き人の法名や遺骨の安置してある壇）の線香の火は絶やさずつけておくのですか」  
D 「巻線香というのがあって、よく四六時中線香を焚いていますが、いつもかも焚く必要はありません。お勤めをする時だけ線香を焚いたらいいのです」  
G 「ローソクといっても電気のものですが、始終明かりをつけておくのですか」  
D 「ローソクもお勤めをする時だけでいいのです」  
G 「四十九日の満中陰の法要をする場合、三月にかかるというので、三十五日で切り上げるとよくいいいますが、どうなんですか」  
D 「月の後半に亡くなられた人の大半は四十九日目が三ヶ月にまたがるのはごく自然なことです。それを三月にまたがって満中陰の法要をしてはいけないというのは何の根拠もない迷信です」  
G 「どうしてそういうことを言うようになったのですか」  
D 「語呂合わせの迷信だと言われています」

G 「どんな語呂合わせですか」  
D 「（四十九日が三月にかかる）は（始終苦が身につく）と語呂が似てます。だから三月にかかって四十九日の法要をするとか何か災難が身に付くのではないかという、ナンセンスな話です」  
G 「よく四号室というのを嫌ったりしますね。四は死をイメージするからでしょう。それとよく似てますね。よく似た語呂から、悪いイメージを連想して、それを怖れるのですね」  
D 「そうですね」  
G 「なぜ怖れるのでしょうか」  
D 「人間は目に見えないタタリとか罰とか悪運とか怨霊とか、そういうものを心の底で大変恐れています。だから、迷信とは頭では思っているけど、ひよつとしてそれが縁で禍や災難が来るのではないかとびくびくしているのです。そのおびえがあるかぎりたとえ迷信と頭で分かっているけど、大変気になるのです。だからいつまでも迷信は無くなりません」  
G 「何だかおかしな感じと感じていても、なかなか無くなりません」  
D 「（私は科学的にハッキリしないことや理屈に合わないことは信じない）とか、（私は無神論者だ）といつて、迷信や俗信は信じないという人が、自分の身に不幸や災難がふりかかり、そんな時まわりの人から、先祖の罰だとか家の方角が悪いからなっ

たのだなどと言われると、簡単にそういうものを恐れたり振り回されたりしてしまいます。迷信は理屈や科学的合理主義では克服できません」  
G 「科学的な合理主義では迷信を克服できないのはなぜでしょうか」  
D 「人間の心の中には、福を喜び、禍を怖れ嫌う心、もう一つ言えば生を愛し死を憎む煩惱があります。この煩惱が元になって、人は災難不幸を（生み出し）、それがふりかかるのを恐れるのです。その煩惱が無くならなくても、それを批判してのり越える真実の智慧（念仏の智慧）があれば、迷信に惑わされなくなつてきます」  
G 「人が災難不幸を生むといわれましたがどういうことですか」  
D 「災難不幸は、自分に（これは災難だ）（これは不幸だ）と認めた人にあるものです。そういう価値判断をしない人、しなくもいい人には無いものです。タタリやバチも同じです」  
G 「そこをもう少しお話ください」  
D 「タタリや何かのバチなどというものは実際に存在するものではありません。（たたられた）とか（バチがあつた）と受け取る人に初めて存在するものです。それらはいわば人が（そう思い込み、そう受け取った）その価値付けの内容に他なりません」

（了）

# 歎異抄 第十二章第五講

われもひともし、生死をはなれんことこそ、諸仏の御本意にておわしませば、御さまたげあるべからずとて、にくい気せずは、たれのひとかありて、あたまをなすべきや。かつは、「諍論のところにはもろもろの煩惱おこる、智者遠離すべき」よしの証文そうろうにこそ。

(歎異抄第十二章)

現代語訳(「だれもがみな迷いの世界を離れることこそ、仏がたのおこころでありますから、わたしが念仏するのをさまざまにしないでください」といって、気にさわる態度をとらなければ、いったいだれが念仏のさまたげなどするのでしよう。さらにまた、いい争いをすれば、そこにはさまざまの煩惱がおこるものであり、智慧ある人はそのような場から遠く離れるべきである」ということの証拠となる文もあるのです。)

「だれもがみな迷いの世界を離れることこそ、仏がたのおこころ」であると言われます。これは仏教の教えは多岐にわたっていて、さまざまに説かれています。それが仏の教えである限り、その教えが目的とするところは衆生が「生死を離れて涅槃のさとりを開く」こと、すなわち仏になることであります。ですから、たとえ他の人から見ても、念仏の教えが低級な教えであろうとも、お念仏は私たち

をして仏教の目的である生死を離れさせて仏にならせていただくのであるから、お念仏で救われることは諸仏のおこころにもかなうことです。だから、道は違っても同じくさとりを開く教えであれば、お念仏がいたずらに非難されることは悲しいことであるし、どうぞお念仏を妨害することはやめてほしいと、唯円房は念仏を非難する人に申されるのであります。

ここで思われることは、仏教はさまざまに説かれ、教えられていてもその目的とするところは同じであって、ただその目的であるさとりを開いて仏になる道、すなわち方法がそれぞれ違うのであると、よく言われます。近年は諸宗教との対話も進められ、仏教に限らず諸宗教の目的とするところも、本来別では無く、ともに宗教的真理に触れることが諸宗教の共通目的であるとされ、ただ諸宗教の違いは宗教的真理に人が触れる道や方法の違いであるという、そういう論議もされるようになってきています。

禅宗の内山興正師などはキリスト教と禅の違いは、宗教的真理の切り口の違いであって、それはたとえば一本の竹を刃物で切る場合、切り口を円形に切る場合もあれば、小さな楕円形に切る場合もあるように、宗教的真理をどう見るか、どうとらえるか、どう関わるかの違いによって諸宗教の違いがあるのであって、切り口の形は違っても同じ竹であることに変わりがない。そのように、教義はそれぞれ違っても、同じ一つ宗教的真理へのかかわり方であるから、お互いの宗教は平和的に共存すべきであると言われています。

たしかにそういわれる論旨はうなずけます。

以前からこの種の問題にはよく「わけのぼる 麓の道は多けれど 同じ高嶺の月を見るかな」という歌が引かれます。この場合は概して仏教諸宗の間においてのことですが、山上への入り口が違い、登る道は違っているけれども、最後頂上では同じさとの月を見るのであるから、教義の姿は異なっても、それは道が違うだけで行き着くところは同じさとりにある、と言われるのです。それゆえ教えの建て方や構造が違うからといって、他宗の教えを非難したり、まして争うべきことではない、むしろ他の教えを尊敬すべきであるとの意でありましょう。これもよく分かる話であります。

ただ問題は、(切り口が同じであり、いろいろな道は要するに同じ目的に行くのだから、教はどれでもいい)とはいえないのです。たとえば山に登る場合に道はたくさんあっても、いざ登るとなると、その中の一つしか選べません。二つの道を同時に登ることはできないからです。またどんな道でもいいというわけにいきません。険しい道もあれば緩やかな道もあります。狭い道もあれば広い道もあります。あるいは曲がりくねった道もあればまっすぐな道もあり、徒歩で歩いて登る道もあれば、クルマに乗って登る道もあります。

実際に登るとなると、(私はどの道を登ることができるか)という問題にぶつかります。ことに私のような愚悪の者は重い病人にもたとえられています。そうす

れば自分の足で歩いて登ることは不可能です。乗り物に乗せてもらってのみ登ることができません。だから繰り返しますが、(わけのぼる麓の道は多けれど)、どの道に登るかという実際の問題になると、私においてはただ一つの道、それも乗り物に乗せてもらって登ることができのみです。

この歌が教えていることは、多くの仏道は仏の悟りへの異なる道であって、諸宗はお互いに、排他的に他を非難して争うべきではないという教訓ではありません。

しかしこの歌を、「真理は結局一つだから、どんな教えでもいいのだ」とよく言われるような意味に理解すると、そのように言う人は、だいたい宗教を自らのこととして求めたことのないいわば傍観者であります。だから「どんな宗教でも結局同じ」という一見気の利いた話をされますが、山に登ったことも登ろうと試みたくとも無い者が「どの道も結局頂上に行くのだから、どんな道を登ってもいいんですよ」などと無責任なことを言っているのと等しい。病人や老人にはとても登れそうもない急な崖道もあるのが実際の道であるのに。

そうすると自分の力量や能力を考えてみると、どういう教えに帰依するかということは決して軽視すべきことではなく重要な問題であります。だから聖人は「おのれの能(力)を思量」して我が身の助かる道を定めよと言われているのです。

# 香樹院師の言葉

一、死ぬる命を向へ延ばしておるゆえ疑いがはれぬ。

一、如來様に疎しいゆえ疑いがはれぬ。

一、おのが胸をあてにしているゆえ疑いがはれぬ。

○死ぬる命を向へ延ばしておるゆえ疑いがはれぬ。

弥陀の誓願は「乃至十念せんにもし生まれずば正覚を取らじ」と表されている。それは「我が名を称えよ、きつと必ず浄土へ生まれさせる」の誓いである。もつとつづめれば「生まれさせる」の仰せ、「助くる」の仰せである。この仰せの一番のお目当ての人は「臨終一念に差し迫った人」である。観經の下品の機である。それゆえ、この本願を直づけに聞く場合は「今死ぬる」場である。この場に我が身をおくと本願と真向きになるのである。ゆえに蓮如上人はしばしば「仏法には、明日と申す事、あるまじく候う」と申されたのである。

（まだまだ生きるつもり、生きてるつもり）という風に「いのちを向こうへ延ばして」長綱張って聴聞をすると、弥陀の本願を遠くにおしやってしまう。今闇に落ちゆく今の我が身にかけられているたった一つの救い、と感ぜられなくなる。そうなる、弥陀の本願のまことが身にこたえないから、いつまでも本願を受け入れられないのである。

禿顯 成師の言葉に「己が死ぬるということを忘れての聴聞は無駄ごとである」といわれている。

しかし、そういわれてもなかなか今死ぬると思えないのが悲しいかな私である。こんな私には「死ぬる気になれぬぐるみ、死なねばならぬ身じやと云うことを忘るなよ」との古人のお言葉がまたありがたい。

また、「死ぬる命を向へ延ばしておるゆえ」、いつかは自分が変われる、どうかなれると、将来に期待するようになって、弥陀が今のまれないのである。とかく私たちは「もつと聞けばいつか分かるようになる」「もつと聴聞すればいつかは信心が得られる」「もう何年かすれば有り難い信者になれる」と、そういう思いで聞いている。すなわち自分はまだどうかなれる・どうかなるの思い(定散心)で聞いている。聖人はこれを悲しみたまひ、「定散心まじわるがゆえに、出離その期なし」と申されている。

それが、「もう今晚のいのちかぎりではない」となると、（いつか私はどうにかなれる）という希望は全くなくなる。そうなる、もうこのみすばらしい、どうにもならない、ありのままの、この私のみままで弥陀に助けていただくより外はない。この場においては、もう理屈も何もない。「我をタノメ」の弥陀の仰せに「有難う」と憑む外はなくなるのである。

ところが、まだまだ生きてるつもりで聴聞をするから「いつかは助かる身になれる」という思いが交わって、弥陀の本願が直裁に受け取れぬこととなり、それが本願への疑いとなる。

○如來様に疎しいゆえ疑いがはれぬ。

阿弥陀様と疎遠になつていから、疑いがはれないとの仰せである。本願を信じていない限り、弥陀にうとうとしのは仕方がないとしても、なお弥陀に疎遠な姿での聴聞と弥陀に親しい関係での聴聞とがある。具体的にどうかと言え、未だ弥陀の本願を信じていることが出来なくともお念仏に親しみ、お念仏を何かにつけて申す生活をする人は本人は気が付かないけど弥陀と触れあっている。だから触れあっている、弥陀の慈悲心がいつの間にか私の心に浸透してきて、それがやがて本願を疑う心を破る大事な縁となる。だから仏法聴聞にころざした先人の多くが、信があるうとなかろうとまずお念仏を申すべしと、称名をお勧めになつてい。

つまり名号が阿弥陀様そのものであるから、名号を称えることは、阿弥陀仏と擦れ合っているのである。

ところがお念仏も申さず、ただ真宗のお話を頭で聞くだけだと、弥陀を身近に感じれないままとなるゆえ疑いがなかなかはれない。

○おのが胸をあてにしているゆえ疑いがはれぬ。

まことにこの通りである。なかなか弥陀の本願である「我をタノメ」の一言が通らないのは、自分の胸すなわち自分の心や考えや思いを当てにし力にし頼みにしているからである。自分の心や思案が（役に立つ）と思う憍慢心が、弥陀の本願にたいして耳にフタをしてしまうので

ある。自分の胸で考えていることや思いが破綻し、無効となり、無力となり、「チリばかりも当てにならない」となる時、「そのままなりで助ける」の仰せが徹到してくださる。

そうして、「私は自分をたのみにして、阿弥陀様の仰せを聞くふりをして全く聞いていませんでした、いままでも何を聴聞していたのでしょうか。自分で自分を助ける事ばかりしていました。何と愚かなことを長年していたのでしょうか。仏様をないがしろにしていました。にも関わらず、私をあきれずに（そんなお前を）と喚びづめに喚んでくださっておられましたか。阿弥陀様本当に申し訳ありません」と慚愧されてくるのである。（了）

## 〈住職つれづれ雑感〉

雨の少なかつた夏も終わろうとしている。蒸し暑いと身体がしゃんとしない。お盆参りの疲れも八月二十日ごろにはようやく取れ、この時期は旅行などがしたくなるが、何かと用事があり、そういう余裕の無いまま日が過ぎていく。ただよく来る孫を見るのが楽しみである。顔を合わすにつくりしてくれるので、私が慰められる。なぜにっくりするかそれが不思議である。よく見慣れた顔だからだろうか。そういう記憶が孫のどこに形成されているのか、不思議である。

八月二十四・二十五日に三重県のM君のお寺に行く。もうこれで三度目である。客間が新築されて、広くて静かで美しく、過ごしやすい。床の間に村田静照師が念仏しておられる墨絵の掛け軸がかかっている。先々代の住職の絵筆とのこと。村田和上の高弟だったお方である。村田和上は名師としてよく知られた高僧で、和上の風貌が絵によく表れている。